

第 部門

阪神・淡路大震災から学んだ経験と教訓に関する研究

関西大学工学部 学生員 ○ 織田 衣里子

京都大学防災研究所 正会員 河田 恵昭

関西大学工学部

正会員 島田 広昭

1. はじめに

我が国は、台風、水害、地震、津波、噴火などの自然災害多発国である。その中でも、近年最も注目を集めているのが「地震」による災害であり、我々に衝撃的な記憶として残っているのは、阪神・淡路大震災である。戦後最悪の極めて深刻な被害をもたらした震災を経験したことで、被災者をはじめとする国民は日頃からの備えがいかに大切かということを感じ、防災意識は自然と高まっていった。しかしながら、10年という時間の経過とともに阪神・淡路大震災の記憶は風化されつつある。

そこで本研究では、震災の経験の風化を防ぐために、有識者に対して行ったアンケート調査の回答結果から、その教訓を対象者別(国民向け、国際社会向け)・時間経過別(災害前、災害時、災害後)に分類して抽出・整理した。さらに、2004年10月23日に発生した新潟中越地震にそれらの教訓が生かされているかどうかを、数社の新聞記事を追跡することで検証した。

2. 調査方法

本研究で対象としたアンケート調査は、内閣府が震災10年事業を前に有識者に対して行った「阪神・淡路大震災の教訓は何か」という記述式のものである。その回答結果から、その教訓を対象者別・時間経過別に分類して抽出・整理を行った。さらに、2004年10月23日に発生した新潟中越地震に関する災害発生時から約1ヶ月間の数社の新聞記事を追跡することで、それらの教訓がいかにされているかを検証した。

3. 調査結果および考察

図-1には、前述のアンケート結果より抽出した国民向けの教訓を示した。「就寝時は必ず携帯電話と電灯を側に置いておく」などの日常生活の中での小さな気遣いから、「生活避難所は情報拠点となるため毎日避難所に行く」など実際に被災した時の知恵まで、数多くの教訓があり、これらは阪神・淡路大震災の教訓として最も身近な教訓である。したがって、国民が自ら災害に備える場合にはまずこれらの教訓を真摯に受け止める必要がある。

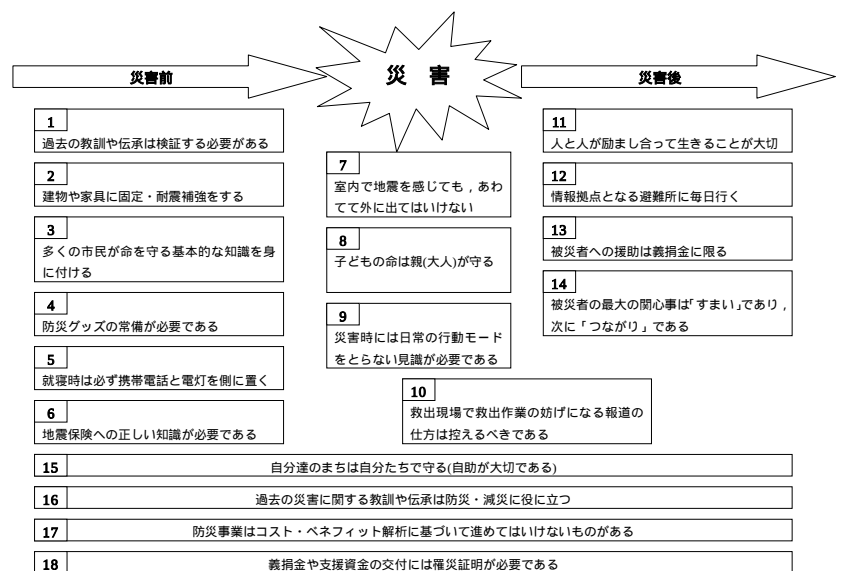


図-1 国民向けの教訓

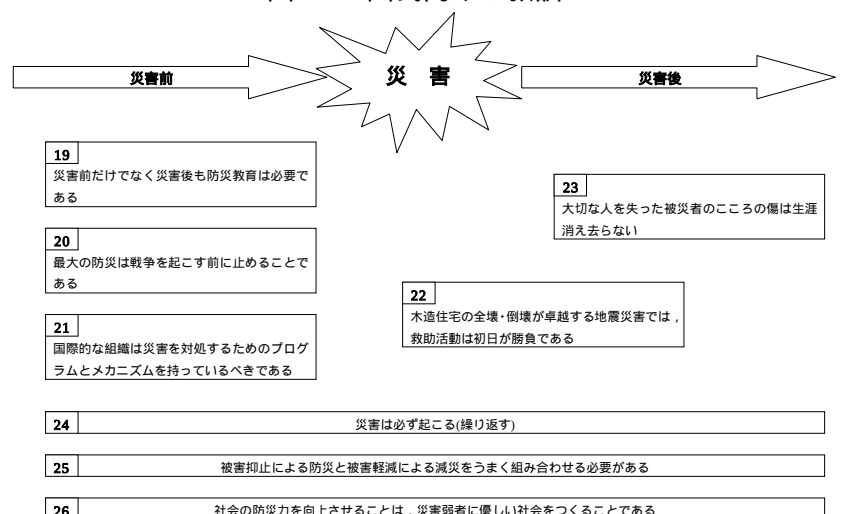


図-2 国際社会向けの教訓

Eriko ODA, Yoshiaki KAWATA and Hiroaki SHIMADA

図 - 2 には、国際社会向けの教訓を示した。これには「災害前だけでなく災害後にも防災教育は必要である」、「社会の防災力を向上させることは災害弱者に優しい社会をつくることである」など、行政や国際機関に向けた教訓が多くみられた。阪神・淡路大震災のような大災害の教訓や伝承は、国内だけでなく世界に発信され生かされなければならない。

図 - 3 には、国民・国際社会共通向けの教訓を示した。これらの教訓は我が国を始めとする先進国や発展途上国、また災害を頻繁に経験している国・災害未経験の国の国民や機関に向けて発信されるべき教訓である。

表 - 1 には、2004 年 10 月 23 日に発生した新潟中越地震の際に、阪神・淡路大震災から学んだ教訓が生かされたかどうかを示した。阪神・淡路大震災と新潟中越地震は、余震活動の規模や道路網の違いなど、いくつかの相違点があったが、「初動対応が早かった」、「ボランティアの中にリーダーとなる人が出てきた」など、生かされた教訓も多数あった。また反対に、「耐震化が進んでいない」、「災害用の食糧、飲料水を備蓄していない」など、生かされなかった教訓もあったことも事実である。

このように、阪神・淡路大震災の教訓を新潟中越地震で実証してみると、引き続き語り継がれていかなければならない教訓や新たな教訓が浮かび上がってきた。その代表的なものは以下のようなものである。

建物の耐震化

我が国では、災害時に避難所となる病院や学校などの耐震診断や補強が未だ半数にも達していない。財政難という問題もあるが、国や自治体は耐震化に対してより一層力を入れるべきである。

災害への備えは常に点検と更新が欠かせない

少子高齢化など地域社会の姿が変わり、防災網にほころびができていいる部分がある。特に近年発生した災害では、犠牲者が高齢者や障害者に集中しており、この教訓は強く語り継いでいかなければならない。

新潟中越地震の経験を東海・東南海・南海地震の防災対策に生かす

国や自治体は、地震の時間差発生による被害拡大を防ぐため、住民意識の啓発に努め、また住民は自助や共助の精神を持って災害に対応する必要がある。

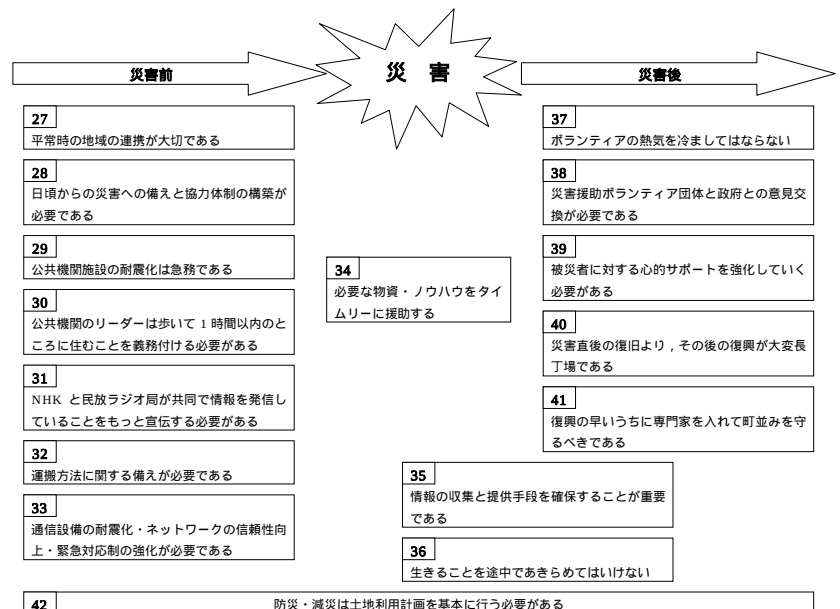


図 - 3 共通(国民・国際社会向け)の教訓

表 - 1 教訓は生かされたか

生かされた教訓	自衛隊・警察・消防などの初動は比較的早かった
	近隣都府県からの応援部隊の出動が早かった
	自助の精神が地域を支えた
	隣近所の日頃からの緊密な付き合いが地域を支えた
	(仮設住宅について)集落単位の入居が考慮された
	集会所や談話室が当初から設営された
生かされなかった教訓	ボランティアの復旧作業の手助けは心強かった
	ボランティアの中にリーダーとなる人がでてきた
	増加している高齢者に着目した防災対策ができていなかった
	病院や学校などの耐震診断や補強が未だ半数にも達していない
	耐震化が必要との意識はあるが、財政難もあって進んでいなかった
	地震対応のマニュアルがなかった
新たな教訓	災害用の食糧、飲料水とも備蓄していなかった
	阪神・淡路大震災でも問題となった救援物資の偏在が起きた